図書館とマルチメディアセンターとの統合建物「コラボレーションセンター」は、利用者にとって如何に改善されたか？

伴 美 子*

滋賀医科大学附属図書館

I. はじめに

滋賀医科大学（以下、本学）では平成 11 年 10 月、附属図書館とマルチメディアセンター（以下 MMC）との統合建物「コラボレーションセンター」が完成し、学内における学術情報総合センター的な役割を果たすべく、学術情報の提供および研究情報の発信基地として多面的にとりくめる体制と業務遂行に努めている。

最初に、この施設の実現に至った経緯等の概略を記す。

II. 統合建物の実現に至った経緯

本学では平成 5 年に学内 LAN が設置され、同 10 年 2 月に教育研究用電算システムを導入したが、学内の数カ所に機器を分散配置したため、管理運用面で不便をきたしていたこと、また書架の狭隘化により図書館の増築が急務となってきたこと、これらの問題を解消するために文部省へ次のような予算要求を行った。

平成 10 年度概算要求：「総合情報処理センターの新設」

平成 11 年度概算要求：「マルチメディアセン

ターを含めた図書館の増築」「電動式集密書架の設置」

その結果、平成 10 年度補正予算として「コラボレーションセンター（機能集中型研究融合施設）の整備」が措置され、統合建物への増改築が実現した。

設計等については次のとおり。

- ・増築面積 1,410㎡（全体 3,133㎡）
- ・設計内容について

設計当初から、マルチメディアセンター運営委員会・図書館委員会・図書課の間で設計内容の検討を行い、① 利用者の出入り口を 1 カ所にする、② 車椅子利用者向けに設備改善、③ チュートリアル教育スペースを考慮、の 3 点を柱として担当課に要望した上で設計原案の作成を依頼し、細部にわたって検討を重ねた。

- ・設備費・OA 機器移設費は別途要求

補正予算は建物工事費のみであるため、電動式集密書架・入退館ゲート等は概算要求事項として要求する他、分散配置されていた MMC の OA 機器の移設費や新規に必要な設備機器等については別途要求し、このうち、MMC に関するものについては建物完成と同時にほぼ実現した。

そして建物竣工後においては、つぎのような設備改善が実現した。

MMC：平成 12 年度補正予算により、「ギガビットイーサネットワークシステム」が設置され、

*Yoshiko BAN：〒520-2192 大津市瀬田月輪町。

（2001 年 12 月 19 日 受理）

伴 図書館とマルチメディアセンターとの統合建物「コラボレーションセンター」は、利用者にとって如何に改善されたか？

写真 1. 図書館

写真 2. MMC

超高速かつ大容量の画像データ等の送受信が可能となった。さらに図書館も含めて、ビデオ監視カメラ装置が16カ所に配置された。

図書館：平成13年度概算要求による「電動式集密書架（8万冊収容可能）」が同13年12月に設置され、さらに「自動貸出し返却装置」が同14年3月に設置される運びとなった。また、電子媒体情報として新規にEBMR（Evidence-Based Medicine Reviews・CD-ROM、ネットワークシステム）が同12年3月に整備された。なお、未完成部分の「車椅子併用の入退館ゲート」への更新および自動ドア化は今後早急にとりくむべき課題として残されている。

Ⅲ. 統合建物以後の利用者サービスの充実

図書館がMMCとの統合建物になったことにより、MMCによる情報リテラシー講習へのとりくみやコンピュータ機器管理等によって、図書館側の利用サービスおよび業務の効率化に良い効果をもたらしている。

まず、MMCについて簡単に概要を説明する。

1. MMCの概要

MMCは平成9年4月、学内措置施設として発足し、図書課に「マルチメディアセンター係」を

設置して係長は総務係長が兼務していたが、同10年4月から「マルチメディア係」に改称して専任職員を配置、主にMMCの業務を所掌している。

1) 組織

センター長は図書館長が兼務。副センター長は生命情報学の教授が兼務。教務職員1名・非常勤職員1名が専任。図書課マルチメディア係長・係員1名が兼務。

2) 業務内容

- ・学内LAN監視システムおよびコンピュータ機器の維持管理
- ・情報処理教育分野へのサポート

学生に対する情報処理教育カリキュラムへの参画。

教職員・学生等に対する情報リテラシー教育関連の各種講習会（学内LAN講習会、データ解析入門・応用、ホームページ作成、UNIX入門、ポスター作成入門、JavaScript入門、oracle講習会、その他）。

- ・研究部門・事務部門における各種情報のデジタル化

研究者総覧データベース・研究業績データベースの作成。

事務部門における業務処理の効率化へのサポート。

- 大学ホームページの充実化，Ｅメールによる各種情報の配信およびデータベースへの蓄積，ペーパーレス化の促進，他の情報処理関連部門との連携。

次に、統合建物になったことおよび MMC による各種とりくみが図書館に及ぼす効果について、具体例を挙げて説明する。

① MMC と同一建物であるため、双方のエリアを往来でき、文献資料と情報機器のいずれにも関心を持たせる物理的環境となっている。また増改築されたことにより、快適に過ごせる空間（空調完備も含めて）が増え、入館者数も増加している。

③ MMC エリアにおける情報処理学の授業や

④ 文献検索ガイダンスやオリエンテーション(年6～7回)の実施においてもMMCと共同でとり組み、またMMCによる各種講習会の実施が文献検索等にも連関し合って、利用者にとっては学術情報への多様なアクセス方法を習得できるという良い効果をもたらしている。

① 情報処理技術を伴う図書館業務において、図書課の１係であるマルチメディア係は日常的な接触を通して、図書館員への技術的な指導・援助を行い、スキルアップや図書業務の効率化をサポートしている。

② ネットワークの新たな構築についても、MMC が図書館を含めて共同でとりくんでいる。たとえば図書館の電算システムを MMC と一本化して契約したり、情報サービス内容の充実や効率化、電子的図書館の推進など、多様なかたちでとりくめる体制にある。最近では平成 14 年 3 月におけるシステム更新の際に、「自動貸出し返却

伴 図書館とマルチメディアセンターとの統合建物「コラボレーションセンター」は、利用者にとって如何に改善されたか？

装置」が新たに導入されるという成果があった。

③ 各種利用サービス業務においても、MMCの協力を得てEメールによる業務処理を促進し、効率化を図った。

IV. さらに豊富な学術情報の提供をめざして

今後の課題として残されている電子的図書館機能の充実・強化等については、現在以下のようにとりくんでいる。

1. 医学情報データベースの提供充実へ

すでに平成10年度より、学内LANを介して、CD-ROM版による医学情報（MEDLINE, 医学中央雑誌, Current Contents）を提供してきた。さらに同13年度からはEBMRのCD-ROM版、また看護学関係のCINAHLのCD-ROM版を導入し、臨床実習教育やチュートリアル教育への効果的な活用・診療における実践の応用・研究領域へのサポート等、多様な情報サービス環境の整備充実を一步前進させた。

しかしながら、これらの価値あるデータベースを如何に利用者に広く活用してもらうか、この課題にとりくまなければ真に情報環境整備の効果を挙げたとは言い難い。本学としては今後も利用者

向けEBMR講習会を数多く開催したいと考えている。

2. 電子ジャーナルの導入拡大へ

外国雑誌の価格高騰・円安により、冊子体購読数は減少傾向にあるため、本学でも電子ジャーナルの導入に向けて準備を進め、平成14年からは国立大学図書館のコンソーシアム契約に参加し、IDEAL（アカデミックプレス社）の導入を開始したところである。今後はさらに日本医学図書館協会のコンソーシアムに参加する予定で準備を進めている。

3. 全学的な情報処理部門の中核的な役割を担うMMCへ

本学では、学内の各情報処理部門を、全学的な視野に立ってより合理的かつ効率的な運用を図り得る総合的な組織に統合する施策が検討されている。すなわち、MMC、医学情報部、実験実習機器センターおよび事務局の関連部署等、情報処理分野における教育・研究・診療へのサポート部門を、有機的・効率的かつ計画性をもって遂行し得る組織体制に転換しようというものである。この中でMMCは中核的な役割を担う存在として動き始めている。

写真3. オリエンテーション風景

写真4. 演習室での検索講習

V. 図書館員のレベルアップが図書館の存在意義を高める

できる限り豊富な学術情報の提供を図るべく、冊子体に加えて電子媒体の情報を導入し、多様な環境を整備することは財源があれば可能であるが、それらの情報を利用者が如何に効率的に活用するかが問題である。つまり「宝の持ちくされ」になっ
ては立派な環境も全く意味がない。そこで図書館員の役割が重要になってくるわけである。とくに電子媒体の情報については、まず検索方法をしっ

かり利用者に広めること、それには図書館員自身が日頃から研鑽を積み、専門性を高めること、そして利用者向けの講習会を数多く開催すること、こうしてやっと環境整備の実を挙げることができると考える。

利用者にとっては図書館員による親切なレファレンスが何よりの頼りになることであろう。そして、図書館員が専門性を発揮できるようなサポートをすることがひいては図書館の存在意義を高めることにつながるものと確信している。